

— 連載 —

美術館のある風景 (第4回)

丸の内のまちづくりと美術館

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二



三菱一号館美術館の開館記念展が「マネとモダン・パリ」展であったことは、前回の高橋館長の紹介の通りです。当時、私は、丸の内の歴史とまちづくりに通底する開館記念展となることを願っていました。館長の選んだテーマは、マネという革新的な作家を軸に、パリの街が大きく変貌をする時代を都市的スケールで取り上げる魅力的な内容でした。

1990年代半ば、情報通信技術の進化はグローバル経済を加速し、東アジアの都市間競争の顕在化する時代でした。丸の内のまちづくりは「経済再生＝都市再生」という大きな課題に直面していました。丸の内が目指した方向は、歴史的に形成された都市基盤と企業や人のビジネスの集積に、新しいワークスタイル、都心活性化、ビジネスの交流・創造、環境共生、都市文化などの新たな要素を加えて丸の内を組み立て直す「丸の内再構築」計画でした。2002年の丸ビル建替え竣工に始まる再構築の取り組みは、やがて緑豊かな街並みにウインドウショッピングやカフェで寛ぐ人々などのシーンを生み出していきました。一方で、ビジネスクラブやビジネス交流施設、ビジネススキルの学びの場、託児所などのワーカーの生活サポート施設の整備も進みました。

そして、2010年4月、日本の近代都市形成の一翼を担った丸の内、その原点である三菱一号館の

復元建物を活用する美術館が誕生しました。その開館記念展は、明治の丸の内の草創期に先立つこと四半世紀前のパリ、現在に繋がる大きな都市改造と近代市民社会の成立の時代を取り上げた「マネとモダン・パリ」展でした。丸の内の文化や美術館のあり方を探る企画ともなりました。それから4年、今年4月には開館から5年目を迎えます。1月30日から14本目の企画展「ザ・ビューティフル—英国唯美主義1860-1900—」展が始まります。1894年竣工の三菱一号館を設計したジョサイア・コンドルが活動した時代の英国美術の展覧会です。英国ヴィクトリア朝のクィーンアン様式の赤煉瓦の美術館の中庭のレストランで展覧会の余韻を語り合う人々のシーン、オフタイムに美術館でリフレッシュしたワーカーが緑の中庭(上掲写真)を歩む姿も、いつもに増して街に溶け込んで見えることでしょう。

最後に、美術界からの当館への期待を紹介します。「都市型美術館として、地域の歴史と文化の発信基地として担うべきその使命は大きい。」(第6回西洋美術振興財団賞《文化振興賞》選評より、2011年11月)との指摘です。街と美術館の連携する意義を再確認し、その為にも、同じく選評の「広く美術、文化活動に寄与するような、高いレベルの展覧会の実現」への期待に応える美術館運営に心がけたいと改めて思います。